

島根県立大学 総合政策学会
『総合政策論叢』第27号抜刷
(2014年3月発行)

〈翻訳〉

近代環チベット地域における 回族の内陸貿易

馬 平 著、辺 境・市川 聖 訳

〈翻 訳〉

近代環チベット地域における回族の内陸貿易¹⁾

馬 平²⁾
辺 境 市川 聖 訳

1. 対環チベット地域の貿易ルートの確立
2. 中間貿易の参与者と利益の分配
3. 環チベット地域における内陸貿易に貢献した回族
4. まとめ

中国の少数民族である回族には複数の特徴がある。たとえば、広域な地域に分布し、数多い他民族と混住している点は、漢民族を除いてみるとほかの少数民族にはない特徴である。特に、回族先住民は商業的取引が得意な点は、明らかに漢民族には存在しない特徴である。そのため、回族が商業的取引によって、中国の漢民族と他少数民族の間の橋渡しの役割を果たしていた。この論点は、近代（清代中期～中華民国時代）環チベット地域と内陸部の商業的な往来において回族の商人に対する考察で明らかとなった。

1. 対環チベット地域の貿易ルートの確立

古来の分類方法によると、中国におけるチベット文化地域は「蔵」、「衛」、「康区」と「安多」の4種類で構成されていた。現在のチベット自治区以外、「康区」と「安多」もチベット文化の繁栄地の一部と言われる。「康区」と「安多」の地理的範囲は、旧甘、青、川、西康の4つの省の周辺地域を指す。つまり、現在の行政地域にあてはめると、甘肅省西南部の甘南地域、青海省の海南・海西・海北・果洛・黄南・玉樹地域、四川省西北部の甘孜、阿坝などのチベット自治州を指すことになる。

チベット文化区の周辺地域を代表する旧甘、青、川、西康地域（以下、環チベット地域）は、地理的に考察すると、類似した地理的条件を有する。『東南部に岷山山脈、西北部に祁連山脈、西南に巴顏喀喇山脈、南部にヒマラヤ山脈に繋がる馬勒山脈を貫く。それに加えて、水資源の視点から見ると、黄河の源泉、揚子江の川上部の諸支流、洮河や大夏河がこの地域を通る。これらの自然条件に基づいて、一体化的な閉鎖的地域が天然的に形成された。』³⁾ この地域は、ほとんどが高い海拔で人間の暮らしに向かない地域と言える。『すべて高原地帯であり、6,000mの雪山のほか、農産物と植物が生えない海拔3,400m以上の原始的土地がある。通年の3分の2が凍り雪季節のため、数カ所の農村はほとんど遊牧的経済生活が続いている。酷い寒さと地理的な不便さに制限されるため、環チベット地域と内陸部の間は文化的交流がなく、長期的に遊牧の経済形態に停滞している』⁴⁾。

甘肅・青海・四川籍（主に甘肅・青海籍）の回族商人は、従来より内陸部の物産を利用して、環チベット地域に向けて商売を展開する伝統を持っている。近代以降、両方の経済的交易は重要な橋渡しの役割を果たしている。

以上の地域の回族商人は、分布の特徴によって両方の地域の商業的取引に天然的優位性を持っている。諸外国の研究者によれば、その時期には『全国的には回族の中心部がなくても、地域的には存在している。その中で最も大きいほうは甘肅の河州と青海の西寧である』⁵⁾とされている。その結論には正確性が欠けるとは言えない。

環チベット地域の商業的取引の歴史を考察すると、清朝以降、回族商人の対環チベット地域の貿易の中心は甘肅の河州（現在：臨夏）にある。すなわち、河州から北西部へ伸びる循化を経由し西寧まで、また南部へ伸び臨潭、松潘、阿坝より甘孜までの、近チベット地域を含む地域で交易を行っていた。近代以来の回族の商人は主に、以下の4つの路線に沿って対近チベット地域の貿易を推進したとされる（①甘青道北線：蘭州－民和－西寧－湟中－チベット地域 ②甘青道南線：河州－循化－尖ジャ－貴徳－玉樹 ③甘川道－河州－夏河－洮州－迭部－松潘 ④甘康道－洮州－阿坝－色達－甘孜－石渠－玉樹）。

対環チベット地域における貿易の中心には、河州が最も重要な中心地であった。河州は甘肅と青海を結ぶ立地であり、河州城から数十キロ離れた「土門関」は『漢民族とチベット族の境界線』とされている⁶⁾。「土門関」を出れば、甘南のチベット草原に入る。明朝にはすでに河州で馬貿易の管理機構が設けられて、清朝中期まで機能していた。『数年間、河州の馬が鳥や豚みたいに多かった』という記述があり、⁷⁾ 当時河州では『500-600㎡の中、大量の回族に少数のチベット族と漢民族が混在していた』という記述もあった⁸⁾。特に、清朝に政治的な原因で河州に避難に来た回族が増え、甘肅では回族が中心となり、『盖八方（坊）は回族の商業的取引中心となり、人口3万人でほとんど回族であった』という記述もあった⁹⁾。清朝の末年になると、回族が集まった南関といったところは『最も盛んであり、大商人の出入りが多かった』事実もある¹⁰⁾。1940年代、臨夏の八坊は甘肅の四大の商業的取引町の1つとなったとされる¹¹⁾。河州の繁栄は、環チベット地域と内陸部との貿易によってできたものであった。

青海東部にて西寧を中心とする回族の商業的取引（貿易）拠点は河州と似ている。上記の地域は湟水河が通る農業地域として、歴史上では河州と合わせて「河湟地域」と呼ばれていた。ここより西と南はほとんどチベット族が住んでいる。地理上ではチベット・甘肅・四川の貿易ルートに近いと、西寧は商業的取引上では非常に重要な位置になった。

清朝から中華民国期にかけて、「もっとも価値がある皮、アントラー、ムスク、黄金と羊毛の貿易はすべて西寧を中心に行われた」とされている¹²⁾。西寧の近くにある湟中、湟源なども、重要な商業の中心であった。「西寧の近くにある丹噶尔（湟源）地方…西寧には九十里（1里＝0.5km）離れ、チベットと青海にも接している。多巴市がここに移転された以降、回族やチベット族やモンゴル族の貿易の中心として盛んでいた」¹³⁾ 以上の史料から考察すると、清朝以来から環チベット地域向けの商業的取引貿易が形成されていた。その他、甘肅・青海の回族が黄南チベット地域に向けて商業的取引を行った史料もある。青海黄南チベット地域は「河州と松潘に近く、昔から河州・松潘で貿易を行っている」とされている¹⁴⁾。

河州・西寧と類似して、甘肅の拉卜楞では同じく商業的取引で盛んであった。河州の商

業に比べて規模と多様性に欠けていたが、4つの省にも行きやすいため、軍事的に重要な地域であり、さらにチベット仏教における重要なラト楞寺に近く、地域の中の宗教的中心でもある。そのため、昔から商売が繁盛していた。清朝から中華民国にかけて、「遊牧地の輸出商品を集める機能と、内陸部の輸入商品を分散する機能を揃えた」¹⁵⁾、「商人が集まり、西部における漢民族・モンゴル族・チベット族・回族の相互貿易の中心になった」という記述から¹⁶⁾。中華民国16年の県の設置により、商業がより一層繁栄していた様子がある。

清朝において、河州よりさらに対チベット貿易の最前線に立ったのは、環チベット地域の中に入っている洮州（現在：臨潭）であった。「洮州の古い城は新しい城よりも繁栄していて、商業をもっとも大事にしている。各民族の人々が貿易の往来に集まり、特に地元の回族には商売をしない人がいないと言える」とされている¹⁷⁾。他の地域に比べて、洮州は内陸部との交通事情が最適ではないが、チベット地域にもっとも近く、商人たちの出発地となったため、商業的取引上の地位が重要であった。

2. 中間貿易の参与者と利益の分配

甘粛・青海・四川における回族の商業的取引は、当初、明朝の末に茶葉・馬の貿易とともに形成されてきたと見られる。清朝の始めになって規模の小さい商売を多く従事してきた、清朝の中期にかけて環チベット地域・漢民族の内陸部の貿易が徐々に盛んになった。清朝後期「同治帝時期」に爆発された回族暴動が鎮圧されたことによって、家屋を失った回族の商人は貿易に余裕がなくなり、回族の経済が大きく破壊された。清朝末期、回族は正常な生産活動に戻りつつ、生活に困った民衆は小さい商売を始め、再び環チベット地域に踏みこんできた。中華民国期に、環チベット地域における商業的取引活動は最盛期を迎えた。

環チベット地域と内陸部の貿易歴史を考察するには、以下の基本事実をまとめなければならない。

(1)商品の種類

近チベット地域はほとんどが草原のため、畜産品が最も多く生産される。その次は各種の薬と地方食材である。近代の各種史料では詳しく記載してある。例えば、「甘粛省はモンゴルとチベットに挟まり、民間では家畜の養殖が多い。そのため、畜産品には羊、牛、皮が多い」¹⁸⁾、「商業の中心として、皮と羊毛が西寧まで集荷され、その後蘭州まで配送される」¹⁹⁾、ラト楞では日中戦争前と戦中においても、「羊毛は終始輸出商品の売上1位にあり、その次は皮であった」²⁰⁾、青海の果洛地域では「輸出の商品は家畜、皮、アントラー、ムスクとバイムという薬などであった」²¹⁾、「油、羊の腸、塩、砂金」、その中「純黄金の年間産量は約2万両（1両＝0.5キログラム）」である²²⁾。1930年代の調査によれば、甘粛のラト楞だけで、輸出物には以下の商品が含まれた：羊毛、狐の皮、狐皮、子羊の皮、オオヤマネコの皮、狼の皮、カワウソの皮、アナグマスキンの皮、犬の皮、家畜の腸、キノコ、油、アントラー、ムスク、農産物などがあつた²³⁾。

甘粛南部・四川北西部には大量の森林資源を有するため、木材の輸出が盛んだつた。清朝に洮州では洮河木工場と北河木工場を立て、地方の木材を集めて洮河から黄河へ流して蘭州まで販売していた。

環チベット地域の住民たちが求める生産、生活の必需品は、数と種類とともに多くある。例えば、各種の茶葉、シルク、布、紙、煙草、綿、磁器、塩、油、酒類、糖類、小麦粉、青銅製品などが挙げられる²⁴⁾。他にはサドル、銃、段平、針などもある。上記の商品にて、農産物は周辺の地域で作られた以外、ほかの工業製品や生活必需品は遠い産地から輸送されていた。シルクは蘇州と杭州、布と雑貨は天津、磁器は江西の景德町からと挙げられる。つまり、環チベット地域と内陸部の貿易では、少数民族からの輸出は畜産品、家畜、薬、地方食材などあり、輸入は食糧、織物。青銅器、磁器と他の日用品などある。

(2)商品経営の方法

環チベット地域の回族は、経営の規模によって零散商売、中級の商人、大手などある。また、商売の拠点の有無によって異なる。商売の対象は皮、家畜、薬、布、茶葉、食糧などが専門化された。

回族の商人は自分の役割を明確に知られている。チベット草原の各種の商品をできるだけ内陸部へ運び、草原の住民の求める商品をできるだけ内陸部から持ってくることである。その中で、回族の消費者にも商売とサービスを提供するが、全体的には両地域の商業的取引を繋ぐ役割を果たしている。そのため、「臨夏は外来の商品の倉庫」、「西寧は羊毛商品の集荷地」、あるいは「拉ト楞は輸出入貿易の中間地」と呼ばれ、上記の地名には共通点がある。つまり、以上の貿易に従事する回族商人は、ほとんどが中間商人であった。

そこで、環チベット地域からの輸出1位の商品の羊毛を例にする。

清朝の中後期、臨夏の回族商人は近チベット地域で羊毛を買収し始め、羊毛専門の回族の卸屋が生まれた。清朝末期、外国の商社が相次ぎ臨夏へ羊毛を買収に来ることで、羊毛貿易が更に盛んになった。当時、回族の中間商人は「同興店」、「昌新店」、「天興魁」などがあつた。民国9年に、外国商社の撤退と羊毛の値上げにより、「復興隆号」、「玉盛公号」、「隆順祥号」、「歩雲祥号」、「福順祥号」などの商号が出てきた。これらの商号は十数万元から数十万元の資本を持ち、「同興店」はその中の大手となった²⁵⁾。回族商人は拉ト楞で大量買収してから家畜を使い黄河へ運び、羊毛を牛の皮で作られた袋に入れ、専門の人を雇い、蘭州から内モンゴルの包頭まで流した。その後、汽車を使い天津まで送って海外に輸出する。この一連の活動の中で、回族の商人は市場を主導し、生産と物流のプロセスごとに分業を促進し、働く機会を創造したと見られる。

次に、環チベット地域住民の必需品である茶葉について説明する。

中国では古来より少数民族に提供する茶葉を「辺茶」といい、大規模の茶葉貿易が馬との交換という形で固定されてきた。清朝の茶葉貿易活動において、回族の中間商売はかなりの割合を占めたと見られる。「甘肅の茶葉商人には、東柜という山西・陝西籍派と西柜という陝西籍の回族派に分ける」²⁶⁾。清朝の同治時代、西柜の「魁泰通」商号の支配者である甘肅鎮番（民勤）籍の商人馬合盛氏は、当時の蘭州の大手茶葉商であつた²⁷⁾。馬氏は鎮番でラクダを大量に養殖し、ブリック茶を陝西涇陽から甘肅に運輸した²⁸⁾。清朝以来、通常低コストの原材料と低価格の茶葉を環チベット地域に提供された。交通不便の事情を考え、茶葉は事前に各種のブリック茶に加工されていると、草原の消費者に好まれた。さらに四川製の半加工された「大茶」は、質と価格も低いが、低消費水準の民衆に好まれていた。民国時代、茶葉の流通ルートは、湖南省安化江南坪に集荷され、船便で益陽を経由し武昌へ、それから汽車で平漢路より隴海路へ西安まで送られ、さらに涇陽まで送られる。

水質のいいと言われる涇陽でいったんブリック茶に加工されると、蘭州を經由して環チベット地域に流入する。日中戦争期には、軍事的理由で茶葉は重慶から水路で広元へ、また涇陽に輸送されることもあった。上記の複雑なルートは、長い間に回族の茶葉商人に維持されていた。

また食糧流通とも類似している。チベット地域の住民は肉食を主食として、少量の大麦を摂取する食生活である。しかし、環チベット地域の住民は内陸部の漢民族に影響され、近代以来、食糧に対するニーズが急増した。伝統的大麦のほか、小麦粉のニーズを満たすために回族商人の食糧運輸が絶えなかった。拉ト楞では、1940年代に年間的小麦粉需要は700万斤余りに至ったと記載されていた²⁹⁾。甘肅と青海の回族商人は地元で食糧を大量買収し加工してから環チベット地域に転売していた。

大規模の商品が大手の回族商号に独占されながら、小規模の商品も回族商人の中間貿易によって転売されていた。例えば、商人は砂糖と布を産地の成都で入荷し、松潘を經由し拉ト楞まで輸送する。動物の皮を産地の西康から仕入れて、拉ト楞や臨夏で転売する。チベット族住民が使用するハダも、回族商人が産地の成都から入手してチベット族の人に販売する。このような中間貿易は、従来から環チベット地域で見られていた。

かつて環チベット地域では交通が不便であったため、物流は主には家畜に依存していた。しかし、甘肅・青海・四川の回族商人は強盗や自然災害などの危険に向かいながら、山を越えて運輸していた。「春と秋になると、西道堂の商人隊は草原の市場へ出発する。帰る時期になると、古洮州城の皮市場は最も繁栄する時期を迎える」³⁰⁾と記されている。

回族の中にはもう一つの斡旋商人がいる。拉ト楞や臨潭では、家畜商人の間で斡旋する商人が少なくなかった。彼らは漢語とチベット語を堪能しながら商売事情を熟知することで、取引の成功を導く役割を果たす、そのため、臨潭では「旧城では常時商売が行われている」とされている³¹⁾。

また、環チベットの貿易ルートは多くの都市を通る。都市には仲介屋という職業が存在していた。回族の人にも従事する人が少なくなかった。仲介者は往來の商人に接待サービスと商品預かりサービスを提供し、政府の代わりに税金を徴収し、取引の仲介をして料金を徴収し、さらに客に家畜の運輸まで代行する。つまり、典型的な商業の仲介の色を帯びている。

(3) 商業規模と利益

環チベット地域－内陸部の間の貿易の歴史を考察すると、回族が商売上手という特徴が分かる。清朝から中華民国時代にかけて、甘肅・青海・四川籍の回族商人は長い間も商売に専念したため、環チベット地域の貿易においては独占的な地位を得つつあった。「甘肅・青海における羊毛貿易や、チベット族との貿易などの重要な貿易には、回族の人は重要な地位を持っている」とされ、³²⁾ さらに地域によって「回族はチベット族の経済権を握っている」³³⁾、「漢民族は経済的には少数民族の商人の下で生きている」とされている³⁴⁾。臨潭では「商業の主導権は清朝以来、終始回族に持たれている」とされている³⁵⁾。回族の商人は4つの省の商人総数の70%で、取引金額は60%に至る。また拉ト楞地域では「資本金が10万元以上の商号は、皮製品市場の40%を占める。資本金が10万元以下の商号は計130軒余りある。皮の貿易はほとんど青海と臨夏の回族によって経営されている」とされている³⁶⁾。河湟地域では、「民国23年の統計によれば、河州には大きい資本の主は25

社ですべて回族の人であった。資本金は合計1500万元ほどある。中流の商人は107社あり、7割の回族と3割の漢民族で570万元の資本金を所持し、零散の商人は495社あり、6割の回族と4割の漢民族で24.7万元の資本金を所持している。つまり、市場と商売は回族の商人に主導されている」³⁷⁾と記されている。

環チベット地域の回族は貿易活動を通して、「裕福になった人も少なくなかった」との記述もある³⁸⁾。回族商人の成功には2つの理由が考えられる。1つは、回族商人は言うまでもなく苦勞に耐え、商売に適した民族である。次に、回族商人はチベット族に対価不平等の交換を続けたため環チベット地域住民の貿易には莫大の利益が存在したことである。ただ、これまで環チベット地域と内陸部の貿易において、対価不平等の現象は古来より普遍的にあり、回族の商売から始まったものではなかった。回族の不平等交換の行為を当時の社会的背景の中で見ると一概否定することもできないし、現代人の道徳意識で求めることもできない。当時の商業活動は環チベット地域と内陸部の住民の共通なニーズがあった上で成り立ったことである。流通ルートが確立されていなかった当時、草原の畜産品は流通できなく浪費される一方、内陸部の加工済み製品も草原の住民の手に届かない中で、回族の仲介によってお互いに資源の価値が生まれて相互の市場が開かれた。この意味からいうと、対価不平等の交換から回族が莫大の利潤を得たことには、一定の合理性があると考えられる。

3. 環チベット地域における内陸貿易に貢献した回族

甘肅・青海・四川で定住する回族は、地元を拠点にして環チベット地域に向けて異民族との貿易を展開できたのだろうか。以下の要因から考えられる。

(1) 地理的優位性

甘肅と青海に多くの回族民衆が住んでいる河湟地域の例を以下では挙げている。河湟エリアはチベット高原と黄土高原の境界にあり、農業地域と遊牧地域の中央に位置している。漢民族の生活区とチベット族の生活区の境界であるため、儒教文化とチベット系仏教が混在していた。つまり、漢民族文明とチベット族文明、かつ農業文明と遊牧文明を繋がる地域と言える。「地理的な要因と人口の構成」によって、内陸部と環チベット族の間の「政治と民族の移行帯」になり、経済的な中心の地位が決まった³⁹⁾。この地域に定住する回族は人数が多く、歴史が長いため、地理的な優位性を十分に利用したと見られる。

(2) チベット族の商業意識の欠如

環チベット地域は遊牧業を主にし、農業に従事する人も少なくいるが、商売の習慣と意識も不十分なままである。日中戦争の前、甘肅省夏河県のチベット族商人はおおよそ3%程度であった⁴⁰⁾。彼らは人脈がある回族商人か漢民族の商人かに頼り商売を展開する。チベット族の商業意識の欠如は、回族の商売への参与に機会を与えた。

(3) 漢民族商人が環チベット地域への恐怖感

環チベット地域は従来から気候と地理面で厳しく、さらに言語が通じない事情もあり、漢民族に恐怖感を持たれていた。「外部から環チベット地域に入る人があまりいない」の記述から⁴¹⁾内陸部から来た商人はいつも臨夏か臨潭までしか進まないことがわかる。

(4) 回族の民族性

回族は独特な民族と言える。漢民族と体質や言語や服装など形が似ていながら、諸少数

民族と心理や感覚など中身が似ている。この特性によって、回族は漢民族とチベット族との貿易を順調に行うことができた。

(5)清朝の少数民族に対する差別政策

清朝の統治者は民族間の差別政策を実行したため、漢民族、回族、チベット族、モンゴル族の間にはお互いに矛盾が存在していた⁴²⁾。

甘粛・青海・四川では環境が農業に適さないため、生計のために回族には従来から商売の伝統を持っている。しかし、統治者の長期にわたる民族差別政策によって、地元の回族の人は教育や文化や技能の限界に制限され、中国社会の上層部になかなか行けない状況に陥れていた。特に清朝中期以降、内陸部の商人の参入とともに市場の競争が激しくなり、回族商人たちが対抗できなくなりつつあった。そのため、徐々に気候が厳しく、内陸部からの競合の参入が少ない環チベット地域に進入してきた。「チベット牛にチベット族が求める商品を載せて、武器とパオを持ちながら馬に乗って数百人から数千人までの集団で商売をする。草原の遊牧民族に付いて移動しながら商品の交換を行う」、「通年も移動生活をして、その苦労は言葉にできない」などの記述から⁴³⁾、環チベット地域向けの貿易は自主的行為より、仕方のない選択肢と言えるだろう。

回族の商人は苦労を耐え、諸民族の真ん中で生存を求めて流通のルートを開拓した。アメリカの研究者によると「回族は漢民族と他民族の中間の民族」と述べられている⁴⁴⁾。回族商人には「チベット語を話せばお金になる」という意識が流行していたことが明らかとなった。チベット地域に近い回族の人にはチベット語を話せる人が少なくない。臨潭の回族商人は「流暢なチベット語を武器に環チベット地域に入り商売をする」⁴⁵⁾。年中商売に走る商人たちは言葉だけではなく、生活様式もチベット族化した。チベットの文化から、これらはチベット族から親近感と信頼感の獲得と繋がるに間違いはない。

また、回族は伝統を重視しながら新しいことを模索する民族である。現在でも甘粛・青海・四川の回族にはチベット族と結婚する人が多い。「昔、拉ト楞に貿易に来る商人は家族の連行を禁止されたため、チベット女性と結婚するようになり、この現象は拉ト楞寺にも許されている」との記述がある⁴⁶⁾。チベット族と通婚した回族は、大半環チベット地域で定住し、その地元の商人となる。環チベット地域では政治・宗教一体化の体制に沿うため、回族の商人は新しいところに着いたら、必ず地元の上層部の権力者に訪ね、商売の許可と保護を求める。その中、上層部と緊密な関係を作った者もいた。「商売関係で人脈が広く、さらに地元の権力者の顧問になることもある」との記述もある⁴⁷⁾。

商品の交換には偽物や詐欺などの行為が民族間のトラブルになりうるため最も注意されている。イスラム教には商業に関して多くの商業ルールと道徳を決められた。回族商人はルールと道徳感の厳守を通してチベット族と長期的な信頼関係を作った。これについて「西道堂の商人はチベット族の取引先と貸借関係や商品代金の引換はすべて口頭約束を通して決めた」との記述から明らかになった⁴⁸⁾。

回族の商売は長期的になり、チベット族の信頼を得られた。さらに昔「政府の命令が行き届かず、回族のほうは情報伝達が早い」ことになり、郵便運輸の業務を回族の商人集団で受託することでもあった⁴⁹⁾。

4. まとめ

近代の民族貿易史を考察すると、以下の点について回族の功績を評価しなければならない。

(1)環チベット地域の民衆のニーズを満たした

環チベット地域では低下した生産力の制限によって、人々の必需になる生産資料や生活品は内陸部から流入した。それには「お茶は以前から異民族に不可欠な飲み物」、「茶葉の輸出を制すれば異民族の運命を握る」という記述から事実がわかる⁵⁰⁾。他に類似商品もチベット族には重要性があるのは言うまでもない。

(2)環チベット地域の自然資源の開発・利用への促進

環チベット地域では動物製品や鉱山製品、薬製品など物産が豊かであった。交通の制限で経済的な優位性に転換できなかった。回族商人の中間的な役割によって資源の流通が実現できた。

(3)閉鎖地域の流通の改善

環チベット地域は比較的に閉鎖的地域であり、長期的に自給自足の自然経済が主宰になっていた。商品の生産と流通が非常に停滞していたため、回族や他諸民族の商業における努力は、その停滞した経済状況への改善に繋いだと言える。

(4)異民族との文化的交流への促進作用

経済の進歩はある一定の地域にとって直接に物質の豊富化に作用するが、文化や伝統思想に間接的に影響する。しかし、回族商人は商品の輸出入とともに、優れた技術や思想観念を含める内陸部の先進的文化をチベット族に輸入したと見られる。つまり、近代以来、北西部の回族商人は環チベット地域と漢民族の内陸部の経済を繋いだ橋渡しであり、民族間の交流を促進する使者でもある。環チベット地域における民族関係や経済関係を考察するには、回族商人たちの功績を評価しなければならない。

注

- 1) 本稿は、近代環チベット地域における内陸貿易の回族を貢献の歴史を考察した論文である。
- 2) 馬平（1953-）山東省青島市出身。寧夏社会科学院中国回族イスラム研究センター副主任、『回族研究』誌副主編、『中国回族百科全書』編集部主任、寧夏大学客員教授、北方民族大学兼任教授。主な研究分野は民族理論、回族文化とイスラム教研究である。
- 3) 33) 34) 李安宅：《論西北藏民区応用創化教育》，『甘肅科学教育館学報』1940年第2期。
- 4) 嘉木样呼图克图記念集》（チベット語対照中国語），1948年版，第1頁。
- 5) 12) (米) モリア・ホスポカ 崔永紅訳：『馬歩芳在青海（1931-1949）』，青海人民出版社1994年版，11頁。
- 6) 31) 顧少白：『甘肅西南辺区之畜牧』，『西北経済』1942年1巻7、8期。
- 7) (明朝)『河州志』巻1。
- 8) 罗正キン：『左宗棠年譜』，岳麓書社1983年版，234頁。
- 9)『甘寧青史略』副編3巻，31巻。
- 10)『河州採訪事跡』10巻。
- 11) 魏永理主編：『中国西北近代開発史』，甘肅人民出版社1993年版，324頁。
- 13) (清朝) 楊永琚：『辺口亟請添駐県佐以資治理議』。
- 14)『青海地方史略』135頁。
- 15) 25) 丁明德：『拉卜楞の商務』，『方志』1936年9巻3、4期。
- 16) 高一涵：『拉卜楞一瞥』，『新西北』1941年5巻1、2期。

- 17) (清朝)『洮州府志』。
- 18) 『甘肅清理財政説明書』4編, 下。
- 19) 湯逸人:『西北皮行書業之現状と其前途』,『建國月刊』1936年第15卷,第6期。
- 20) 38) 40) 党誠恩、陳宝生主編:『甘肅民族貿易史稿』,甘肅人民出版社1988年版,55頁,45頁,54頁。
- 21) 繩景信:『果洛と阿瓦行記』,『辺政公論』1945年4巻4-8期。
- 22) 吳景敷:『川青辺境果洛諸部之探討』,『新中華』1944年復刊2巻2期。
- 23) 24) 29) 李式金:『拉卜楞の商業』,『方志』1936年9巻3、4期。
- 26) 左宗棠:『交通方法与甘肅茶務疏』,『甘肅新通志』22巻。
- 27) 魏明貴:『明清时期西北城市の商帮』,『蘭州學刊』1978年第2期。
- 28) 徐学力:『古道纵横説明興衰——蘭州古代陸路交通史略』,『西北史地』1988年第1期。
- 30) 47) 48) 明駝:『卓尼の過去と未来』,『辺政公論』1941年1巻1期、2期。
- 32) 白寿彝:『西北回教』,『經世戰時特刊』第39、40期合併号。
- 35) 『西北問題論叢』1941年第1期。
- 36) 陳聖哲:『拉卜楞經濟概況』,『甘肅貿易』1943年2、3期。
- 37) 民族問題研究会編:『回回民族問題』,民族出版社1982年版,第75-76頁。
- 39) (米)チャリス・ゴリア:『青海省 文化辺境の变革』,ワシントン大学修士論文(未発表)1969年。
- 39) 張其昀:『洮西区域調査簡報告』,『地理學報』1935年2巻。
- 41) 秦翰才:『左文襄公在西北』,岳麓書社1984年版,30頁,186頁。
- 42) 50) 秦翰才:『左文襄公在西北』,岳麓書社1984年版,30頁,186頁。
- 43) 竹籐:『回教在甘肅』,『新西北』1947年2巻1期。
- 44) (米)杜磊:『イスラム教、民族伝統と道德經濟:中国海上シルクロードのイスラム教対ムスリム身分の貢献』(泉州)海上シルクロードとイスラム文化国際シンポジウム論文提要『回族研究』1994年第2期より転記。
- 45) 『西北世紀』1949年4巻1期。
- 46) 張慶有:『試論拉卜楞地区各民族の源流』,『甘肅民族研究』1996年第2期。
- 49) 顧頤剛:『西北考察記』『甘青見聞録』より 甘肅人民出版社1988年版,71頁。

キーワード: 環チベット 回族 内陸貿易

(Ma Ping, BIAN Jing, ICHIKAWA Takashi)

